

英語の前置限定詞と遊離数量詞に見られる 語順の特異性とリズムからの制約

大 高 博 美

1. はじめに

英語の語法には、前置限定詞 (prepositional determiners) や遊離数量詞 (floating quantifiers) の語順に見られるように、通常統語規則から逸脱するものがある。ただ、この特異性は、限定詞と数量詞にそれぞれ属する全ての語彙に見られるという訳ではない。そのためか、この現象の起こる理由については、どの文法書にも詳しい説明はない。どの書においても、前置限定詞と遊離数量詞が見せる特異な語順は、統語上の規範から外れる例外とみなされ、特に問題視されることがないのである。結果、L2英語学習者は、これらをイディオムに準ずる固定表現とみなすことで対応している。確かに、英語教育における効率性の観点から言えば、そのような語順の逸脱がなぜ生じたかまで学習者に教える必要はないのかもしれない¹⁾。しかし本研究では、言語学的な観点から、前置限定詞と遊離数量詞がなぜ英語史上で不規則な語順を取るに至ったのかを探求する。ここから得られる知見は、L2英語学習者にとっても、理解が深まるという点で有益なはずである。語順が変化した理由を合理的に説明しようとする、後にも詳述するように、意味論と語彙論の観点からだけでは不十分である。よって、本研究ではリズムからの考察も取り込んでいる。

文法形成の過程を韻律論の視点から考察する手法は、実は、特段に新しいというものではない。英語のリズムが英語史上で文法形成に少なからず関与していることがすでに判明しているからである (Bolinger 1965, Selkirk 1984, 窪園・溝越 1991, 窪園 1995, Schlüter 2005)。例えば、下に挙げる二文は、リズムが語彙論の分野で影響を及ぼした例を示すものである (窪園 1995)。辞書にもある通り、英語の形容詞は種類によって限定用法 (attributive use) を取るもの、叙述用法 (predicative use) を取るもの、もしくはその両方を取るものが決まっているが、実はリズムがこの分類に関与しているという事実があるのである (/● / = 強勢音節、 /○ / = 弱音節、[*] = 非文、斜線「/」はフットの境界を示す)。

1) 事実、Quirk et al (1985) では、all the, all this, both the は、a/the, my/our, this/these などと同様に、固有の限定詞 (determinatives) として扱われている。

- m. lots and lots of / ●○ // ●○ / vs. *a lot and a lot of ○ / ●○○ // ●○ /
 o. quite a lot of / ●○ // ●○ / vs. *quite lots of / ● // ●○ /

最後にもう一つ、リズムが形態素（単音節）の発音決定にも影響する例を挙げる。Wells (2016) によれば、規則変化する動詞の過去分詞形から発達した形容詞（よって接尾辞 *-ed* を語末にもつ）は、過去分詞もしくは叙述用法形容詞として使われる時よりも、限定形容詞として使われるときの方が有核（挿入母音 /ɪ/）で発音されやすいという。

- Children aged 5 /éɪɹd/ ⇔ my aged parents /éɪɹd/ ○ / ●○ // ●○ /
 I've learned it. /lɛ:nd/ ⇔ a learned man /lɛ:nd/ ○ / ●○ // ● /
 He's blessed with ~ /blést/ ⇔ blessed ignorance /blést/ / ●○ // ●○○ /

その理由は、管見では、先に挙げた例と同様に、強勢の衝突を避けるためだと思われる (Otaka 2020)。つまり、ゲルマン系の血を引く英語の基本語には単音節語が多く、結果、語頭に強勢をもつ名詞が多いということが、単音節形容詞が時に複音節語としても発音される理由である。

前置きが長くなったが、本稿では、英語の前置限定詞と遊離数量詞に見られる特異な語順を、それぞれⅡ / Ⅲ節とⅣ節で取り上げ、なぜそのような例外的語順が採られるに至ったかの理由・経緯に焦点を当て、これらを意味論と韻律論の両観点から考究する。ここから得られる知見は、英語教育の分野においても、学習者の理解を深める助けとなるはずである。

Ⅱ. 限定詞

本節では、まず英語の限定詞について概観し、次に、冠詞を句頭に置く一般的な語順から逸脱して固定化したと思われる、限定詞と形容詞・数量詞の特異な語順について順に考察する。

限定詞とは、名詞の前に置かれ、その名詞の文脈における役割を明確にする働きをもつものの総称で、古英語においては“*se*”（現代英語の“*the/that*”に相当）と“*pse*”（“*this*”）しかなかった (Mitchell & Robinson 1982)。同じく名詞の前に付いてその性質に言及する「形容詞」とは異なるもので、具体的に言えば、名詞が「既知」のものか「未知」のものか、あるいはまた具体的に「どの」もしくは「誰に所有されている」ものかなどの、情報のカテゴリーを絞り込む役割を果たす修飾要素のことである。Quirk et al. (1985) では、名詞の前に現れる位置によって、限定詞前要素 (predeterminers)、限定詞中位要素 (central determiners)、限定詞後要素 (postdeterminers) の3クラスに下位分類

されている²⁾。これらの要素は、限定用法形容詞と共起する場合、どれもその前に置かれるという特徴がある。そして、各要素の占める位置は、その名前が示す通り、限定詞前要素→限定詞中位要素→限定詞後要素の順となるが、同クラス内の語は互いに排他的で共起できない³⁾。これら限定詞の分類については安井（1996）による説明が詳しいので、彼による解釈を下に引用して紹介する。

1. 限定詞前要素

このクラスに所属する語としては、“all/both/half/double/twice/one-third/three-quarters/such/what” などがある。この内、“all/both/half” は、例外的に、次に挙げる限定詞中位要素の数量詞（quantifiers: each/every/no/some/any/enough/either/neither, etc.）とは共起できず、相互に排他的である。

例：*all any books, *both each person, *all both boys

2. 限定詞中位要素

「コア限定詞」とも呼ばれ、このクラスに所属する語としては、冠詞（a/the）、指示代名詞（this/that/these/those）、数量詞（each/every/no/some/any/enough/either/neither）、疑問代名詞（what/who/which）、所有代名詞（his/her/my/our/its/their）、複合関係代名詞（whatever/whoever/whichever）がある。尚、“Robert’s” のような所有属格（possessive genitive）は、限定詞中位要素と相互に排他的である。

例：*this Mary’s desk, *Mary’s this desk

3. 限定詞後要素

このクラスに属する語としては、基数詞と序数詞、そして先の限定詞中位要素のところで挙げたものとは異なる次の数量詞が挙げられる（many/much/several/lot of/little/small amount of/lots of/large number of など）。そしてこれらは、限定詞中位要素と共起する場合に後置される。

例：the little prince, a very small amount of water, these many cars, her several friends,

さて、ここからは限定詞の典型である冠詞の取る位置に注目してみる。まず、その一般的語順についてまとめると、「冠詞は、(1) 名詞の前に置かれる、(2) 名詞の前に限定用法形容詞が付くとその前に置かれる、(3) 更にその限定形容詞を修飾する副詞があると

2) これらの3クラスは、それぞれ pre-article, article, post-article とも呼ばれる（安井 1996）。

3) 例えば、*this his car や *every these men などとは言えない（限定詞中位要素）。ただし、my every friend は例外的に認められる。

その前に置かれる」と規定できる。つまり、前置修飾の語順において、後続名詞が「既知」のものか「未知」のものかの情報を示しうる冠詞は、「指示詞」の場合と同様に、句頭に置かれるのが基本ということである。

1. 冠詞 + 名詞 → a/the story
2. 冠詞 + 限定形容詞 + 名詞 → a/the long story
3. 冠詞 + 副詞 + 限定形容詞 + 名詞 → a/the very long story

ところが、ある種の限定副は、広義には後続名詞の意味範囲を絞り込む機能をもつ「形容詞」にも分類されうるにも拘わらず、下の例にも見られるように、冠詞を後ろに取るものがある。「配分副」などとも呼ばれたりする“all/both/half”のことである⁴⁾。故に、これらは「前置限定詞」とも呼ばれ、その語順はL2英語学習者がよく誤用するものの一つである。ただ、これは予想可能な誤用とも言える。なぜなら、元々は定冠詞が句頭に置かれる形こそが普通の語順だったはずだからである。だからこそ、“all/both/half”は、上述したように、限定詞中位要素の数量詞 (each/every/no/some/any/enough/either/neither) とは共起できないのである⁵⁾。では、現行の語順への変化はなぜ起こったのだろうか。本節で考えたいのはこの点である。

1. All the ～ :

All the students seem happy. *The all students ～

I walked all the way to the station. *The all way ～ (c.f. all my/this time)

2. Both the ～ :

Both the parents are in good mood. *The both parents ～

I like both the cats. * ～ the both cats.

3. Half a/the ～ :

Half a mile, Half an hour = A half hour

We have come half the distance.

ところで、上述のような語順が常に見られるのかと言えば、実はそうでもない。特に、上の三種 (1～3) の内、“a half ～” の許容度は、下の Ngram viewer⁶⁾ による検索結果からも分かる通り、“the all ～ /the both ～” と比べ、文献上での出現頻度が割と高い。

4) “All” は、指示代名詞 “this” に対しても前置限定詞となる。例：All this costly social security

5) つまり、両者は共に、元々、冠詞に後続する中位要素だった可能性が高いということである。

6) Google 社の開発した語 (句) の出現頻度を検索するソフトウェアで、英語に関しては西暦1500年から2008年までの資料が電子化されており、年代順に調べたい語・句の相対的出現頻度が検索できる。



図1 : a half ~ /the all ~ /the both ~

しかし、この事実は驚くに当たらないであろう。繰り返すが、元々は“A half ~”の語順こそが普通だったはずだからである。

“All/both/half” 以外にも、名詞句内で冠詞を通常的位置から逸脱させる形容詞がある。それは、数量形容詞 “many”⁷⁾、倍数形容詞 (“twice/double” など)、分数形容詞 (“two-fifths/one-third” など)、疑問形容詞 “what”、それに限定用法専用の形容詞 “such” である。これらが通常と異なる語順を取ることは、下の例文 (4~10) から確認できる。

4. Many a man was in the party last night. c.f. Did many men come ~ ?
5. He paid twice the amount I paid. ⇔ *the twice amount
6. He was ordered to pay double the amount. = the double amount
7. One-third the time ⇔ *the one-third time
8. Two-fifths the amount ⇔ *the two-fifths amount
9. I am not such a fool as to believe that. ⇔ *~ a such fool as ~ c.f. such fools
10. What a (fantastic) view! ⇔ *A what (fantastic) view!

一方、本稿冒頭で言及した英語におけるリズム論（強勢衝突と間隙の回避）を踏まえると、ここで一見奇異に映る語順の特異性もさほど不思議なものではなくなる。“Many” と “double” を除けば、どれも単音節語で、結果的に強勢の衝突が回避できているからである。換言すれば、だからこそ2音節語の “many” と “double” は通常形も許容されるのだと言える (many men⁸⁾ /the double ace: /●○//●/)。とはいえ、“many a ~” に見られる語順は依然謎めいて見える。文語的表現とはいえ、なぜ意味的に複数を示す数量副が単数名詞を従えるのかという疑問が拭えないからである。この理由については後述する。

ちなみに、上掲の形容詞に冠詞が先行する語順も、許容度が低いとはいえ、下に示す Ngram viewer からのデータが示す通り、皆無という訳ではない。それというのも、繰り返

7) 通常の文法書では、数量副 “many” は前置限定副として扱われていない。「定」と「不定」の両冠詞に対して前置する訳ではないからであろう (many a student vs. *many the students)。

8) ただし、“many” の限定用法は疑問文か否定文のみで使われる (例文4を参照)。

返すが、前置修飾句が冠詞で始まるというのは、基本的に、英語の一般統語規則に合致するからなのであろう。

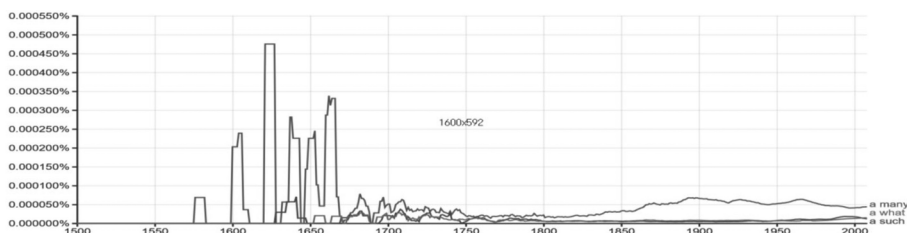


図2 : a many ~ / a what ~ / a such ~

最後に、名詞句中にあって冠詞を後置する副詞に関しては、次のようなもの（二重下線部）が挙げられる。尚、疑問符で始まる例文は文法性が定かでないことを示す。

11. It was rather a hot day. = ?It was a rather hot day.

12. Iceland is quite a cold place in winter. / ●○ / =

? ~ is a quite cold place ~ . ○ / ● // ● /

13. He is only a kind man. = * ~ an only kind man.

14. He is too poor a man. / ● // ●○ / *a too poor man ○ / ● // ● // ● /

15. She is so tall an actress. / ● // ●○ / *a so tall actress ○ / ● // ● // ●○ /

16. Do you know how nice a man he is?

ここで副詞は、後続の形容詞を修飾する（意味を強める）場合にはその直前に置かれ（例11-13右側）、名詞句を含む述部全体を修飾する場合には句頭にある不定冠詞の前に置かれることが分かる（例11-13左側）。ただし、“too/so”と疑問副詞“how”にこの選択はない。必ず前者であるからである（例14-16）。よって、“Rather/quite/only”の取る語順は“too/so/how”のものと同じにはならない。さらに、前者には統語上での選択肢が与えられていることにより、“rather a hot day”/“quite a cold place”に加えて、それぞれ“a rather hot day”/“a quite cold place”も文法的である（図3参照）。しかし実際には、後者の使用は稀である（Cambridge Dictionary）。その理由の一つには、例えば“a quite cold ~”（○ / ● // ● /）がもつリズム構造からも分かる通り、強勢の衝突が起りやすくなるからということが挙げられるであろう⁹⁾。ついでに言えば、「too/so + 形容詞 + 不定冠詞 + 名詞」の構造をもつ名詞句（例：“too/so tall a man”）が口語より文語でよく見られるのも、リズムからの影響が考えられる¹⁰⁾。口語は、リズムから受ける影響が文語よ

9) 2音節語の“rather”と“only”が取る語順に関しては、リズムからの観点だけでは説明がつかない。

10) リズムにより適合する「such a + 形容詞 + 名詞」(such a tall man) という代替表現があることも、この傾向を助長している。

りも大きいと考えられるからである。

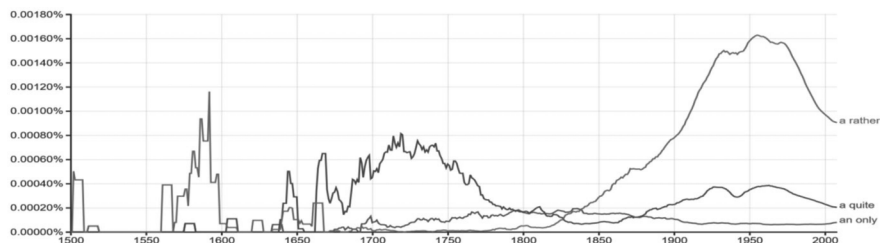


図3 : a rather ~ /a quite ~ /an only ~

Ⅲ. 前置限定詞が特異な語順を取るに至った理由

上での考察結果をまとめると、現代英語において前置限定詞の取る語順が特異なものになっているのは、英語史上の「進化」の過程でリズムから影響を受けたからだということになる。では、この変化は一体どのような過程を経て生じたのであろうか？本節で考究したいのは、この問いへの解答である。

1. 限定詞における語順逆転の理由：仮説

まず最初に思いつくのは、「前置限定詞 (all/both/half) の語順は「数量詞 + of-phrase」の“of”が脱落した型に由来するのではないか」という仮説である。限定詞の“all/both/half”は、先述の通り、冠詞 (a/the)・所有詞 (my/your/his/her/its/their)・指示詞 (this/that/these/those) の前に置かれるが、代名詞として使われる場合には後ろの“of-phrase”の“of”の次には必ず定冠詞 (the) が置かれる (all/both/half of the ~)。また、“of”の後ろに代名詞がくる時は、“of”を省略することができない (all of them/*all them)。

例 : all (of) the students = all of them *all of students

⇒ all the students (c.f. all students)

Both (of) his eyes = both of them *both of eyes ⇒ both his eyes

Half (of) the time = half of it *half of hours ⇒ half the time (c.f. half an hour)

次のグラフは、“all of the people”と“all of people”の出現頻度をNgram viewerで検索した結果を示すものだが、やはり後者の使用は極めて少ないことが分かる。



図4 : all of the people/all of people

次に、“half of the ~” と “half of a ~” の出現頻度を見てみる。上と同様に、後者の出現頻度は前者と比べ相対的に低いが、まったく使われないという訳ではない。ちなみに、現代でも多用される “half an hour” が文法的に可能なのは、後述するように、“half” が普遍数量詞の一つで、それに続く “an hour” も「1時間」という、意味的に限定的な量を意味しうるからなのであろう¹¹⁾。

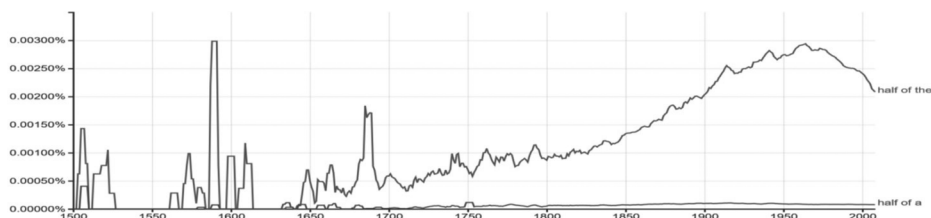


図5 : half of the ~ /half of a ~

よって、結論として、前置限定詞としての “all/both/half” が直後に定冠詞を従える傾向が強いということは、取りも直さず、上述の仮説がまんざらの外れではないことを裏付けるものである。

2. 前置詞 “of” が脱落した理由：仮説

では、なぜ「数量詞 + of + the ~」から成る句において “of” の脱落が可能となったのだろうか？勿論、この動機の背後には「経済原理」が考えられるが、これだけだろうか。この問いに答えるために、まず、なぜ “of” の脱落が普遍数量詞のときだけに起こるのかを考えてみる。

数量詞には二種類あって、一つは普遍数量詞 (universal quantifiers : 「全称数量詞」「全称量化子」などとも呼ばれる) で、もう一つは存在数量詞 (existential quantifiers) である。普遍数量詞とは、集合全体 (全数) に言及する数量詞のことで、英語では “all/both/

11) 限定的な意味といっても、厳密には、“the hour” (「ある特定の1時間」) のもつ意味の「限定性」と異なるのは勿論のことである。

every/half” が該当し、日本語では「すべての / あらゆる / ことごとく」などが該当する。一方、存在数量詞（「存在量子化」とも呼ばれる）とは、一つ以上存在する物（者）に言及するときに使われる数量詞のことで、普遍数量詞に見られるような「集合」の概念が含意されていない。英語では “several/a few/some/ many/a lot of/a little of” などが該当し、日本語では「一つの」「二人の」など、「あるもの（ある人）が少なくとも一つ（一人）ある（いる）」ことを意味する数量詞が該当する¹²⁾（高橋 1985）。

上述の議論に基づくと、先の問いに対する答えは、文法的な観点から、「数量詞 + of + the ~” から “of” が脱落できるのはその数量詞が普遍数量詞だからである」と言えなくもない。しかし、問題は全ての普遍数量詞において “of” の脱落が起こる訳ではないという点である。例えば “every” は、“all/both/half” と同じ普遍数量詞であっても、前置限定詞とならないのである。この理由としてまず考えられるのは、“every” は “all/both/half” と違い、代名詞として使われないからであるというものである。では、なぜこの数量詞だけは代名詞の機能をもつに至らなかったのであろうか？この問いに答えるために、下のような理由が仮説として考えられる。

仮説：“every” が代名詞として機能しないのは、間隙回避の制約を守るためである。

仮に代名詞として機能し、この後に “of-phrase” が続く場合を想定すると、最初のフット中に弱母音が3~4つ生じてしまう¹³⁾ ことが下の例から看取できる。

例：*every of the students / ●○○○○ // ●○ /

よって、現実には、リズムを整えるための解決策として、“évery óne of the stúdents” のような代名詞を従える表現が取られることになる訳である。

→ évery óne of the stúdents / ●○○ // ●○○ // ●○ /

ちなみに、単音節語の限定詞 “all/both/half” では、上述の問題は起こらない。

C.f. (all of the) (stú.dents) / ●○○ // ●○ /

(bóth of the) (stú.dents) / ●○○ // ●○ /

12) 尚、普遍数量詞と存在数量詞には、文法上、次のような違いもある。

(1) There 構文での主語を修飾できるのは存在数量詞だけである。

*There are all of the birds in the cage.

*There is each person in this room.

*There is every book by Ishiguro in the library.

*There is any student capable of speaking in English.

There are a few/several/many films I want to see.

(2) 後置修飾している形容詞・分詞をもつ名詞を修飾できるのは普遍数量詞だけである。

*I found some/many/several/two bicycles stolen.

Each bicycle broken was quickly repaired by him.

All students working hard will become successful.

13) “Every” の発音は二音節の /évri/ と三音節の /évɹɹi/ の二種類がある。

(hálf of the) (stú.dents) / ●○○ // ●○ /

しかし、ここで更なる疑問が生じる。ならば、なぜ“any/each”は普遍数量詞であるにも拘わらず前置限定詞とならないのかという問いである。これらは、1～2音節の語なのでリズム上での齟齬は生じないはずである。特に“each”の場合はそうである。よって、この問いに関してはリズムからの観点だけでは説明できないということになる。

ány of the stú.dents / ●○○○ // ●○ /

⇒ ány stú.dents / ●○ // ●○ / c.f. any student

*ány the stú.dents / ●○○ // ●○ /

éach of the stú.dents / ●○○ // ●○ / ⇒ éach student / ● // ●○ /

*éach the stú.dents / ●○○ // ●○ /

上の問いに答えるために、次に文法的な観点からも考察してみる。

高橋(1985)は、“any”に存在数量詞と普遍数量詞の二用法があることを指摘している。

- (1) 存在数量詞の“any”：否定、疑問、条件、仮定文の中で「何か／どれか一つ・誰か／誰か一人」の意

I'll take any (/əni/) bread you have. (パンがあるならもらいます。)

- (2) 普遍数量詞の“any”：肯定文の中で「どんな…でも、何でも・誰でも」の意で、疑問文の答えにもなる。

I'll take any (/éni/) bread you have. (パンならどれでもいただきます。)

Which car should I buy? Oh, any!

つまり結論としては、“any”は存在数量詞としての用法も併せ持つために前置限定詞になりにくくなっているのではないかということである。

では次に、普遍数量詞“each”はなぜ前置限定詞となるに至ってはいないのかについてである。文法的な観点から考察すると、限定詞“both/each/all/every”はどれも後続名詞の含意する意味範囲が「集合」全体に及ぶことを示すが、このうち“each”は、“every”同様に常に配分的(distributive)に解釈される¹⁴⁾。「配分的」というのは、“each”で示される対象とこれによって含意される対象の間の一対一の対応関係があるということ

14) ついでに、“each”と“every”の違いについて言及しておく、 “every”は集合を構成する成員すべてに意識が向いているのに対し(「残らず全部、すべて」⇒成員数は3つ以上)、“each”は集合の成員に回らずつ注意が向けられる(⇒個性性を強調)。例：Take each of the melons and weigh it. C.f. Take every one of the melons.

である¹⁵⁾ (高橋 1985)。つまり、“each”は、普遍数量詞に分類されるものの、先の“all/both”とは「全数」を意識する度合い(絶対性)において異なるということである。ゆえに、“each”は前置限定詞となりにくいのであろう。

下のNgram Viwerでの検索結果は、“each of the ~”と“each a/the ~”の出現頻度を時系列に沿って示しているが、前置限定詞としての“each”の使用も少なくはない点が興味深い。

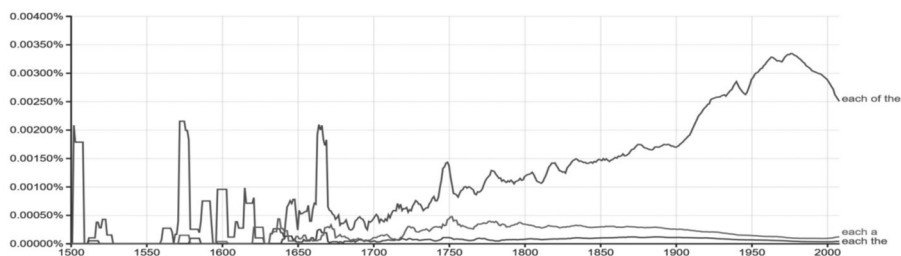


図6：each of the ~ /each a ~ /each the ~

では最後に、再度、不定冠詞の前に前置される“many”を取り上げ、これについて考察する。この“many a ~”(“mania”とも表記される)という一見奇妙な語順は、一体どのようにして生まれたのであろうか? 考えうる仮説としては、「a good/great many ~」が倒置を経由して形成されたのではないか」ということがまず挙げられる。では、なぜこの慣用句に倒置が起こったのかについてであるが、可能性としては11世紀後半以降にフランス語から受けた影響が考えられる。フランス語の名詞句では後置修飾(名詞+形容詞)が普通なので、現代英語においても、法律関係の句を中心にこの語順をもつものが少ないのである。

- | | |
|-------------------------------|----------------------------|
| 例：attorney general「司法長官、法務長官」 | court martial「軍法会議」 |
| fee simple「単純封土権」 | heir apparent「法定推定相続人」 |
| letters patent「開封勅許状」 | malice aforethought「予謀の犯意」 |
| He has books galore「たくさんの本」 | galore (形) |

そして更に、多くの詩人が韻脚(metrical foot)を意識してこの修辞技法を使ったとすれば、散文家も大なり小なりこの新語順から影響を受けたのではないかと想定できる(次の

15) 一方、“all”は文脈によって集合的/配分的の両方に解釈が可能である。つまり、集合的意味解釈が可能なので前置限定詞となりうる訳である。

例：All the men in this room love a woman from Ohio. (Kroch 1974)

集合的：このクラスの男は全員オハイオ出身の一人の女性が好きだ。

配分的：このクラスの男は全員オハイオ出身の女性が好きだ。(配分的解釈では、クラスの男一人ひとりに焦点が当てられており、その一人ひとりに別々のオハイオ出身女性が対応している。)

成句の注を参照)。

例：All of a sudden¹⁶⁾ (/ ●○○ // ●○ /)



図7：all of a sudden 対 all of the sudden

よって、上述の仮定に基づけば、例えば “a good/great many pictures” は、修辭的倒置法の適用で many a good/great picture” となり¹⁷⁾、その後、“good/great” が脱落して “many a picture” が出来上がったのではないかと想定できる。実際に、下の図9と図10のグラフから看取できる通り、“many a good/great ~” の語順は古い英語の文献を中心にその存在が認められるのである。

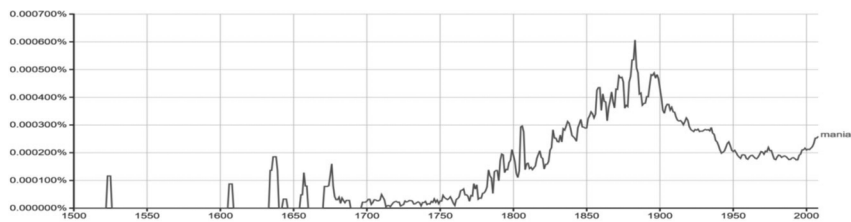


図8：Mania (← many a ~)



図9：Many a good ~

16) この表現の原形を最初に作ったのは Shakespeare だと言われている。彼の作品中に次のような表現が看取できるからである。Is it possible that love should of a sodaine take such hold?” (In *The Taming of the Shrew*, circa 1596) : Sodaine = sudden

17) “Many a ~” の次には必ず単数名詞が来るとは言えない。“Many a hundred people” のような表現も可能だからである。



図10：Many a great ～

IV. 数量詞遊離はなぜ“all/both/each”にだけ起こるか？

よく知られているように、数量代名詞“all/some/both/either/many/each”の中で“all/both/each”は独特の統語的ふるまいを見せる。文中で助動詞や動詞の後に移動する「数量詞遊離」と呼ばれる現象である。

(1) < 数量詞・代名詞 >

例：all/some/both/either/many/each of us have our own dreams.

(2) < 遊離数量詞・副詞 >

例：We should all/both/each have our own dreams.

*They will many attend the conference.

*They will some attend the conference.

*They will either attend the conference.

上の例文(2)の中で見られるような数量詞遊離の現象は、なぜ“all/both/each”にのみ起こるのであろうか？この問題をまず文法的な観点から見ると、数量詞遊離は、前置限定詞の時と同様に、普遍数量詞のみに起こることが分かる(高橋 1985)。よって、存在数量詞の“many/either/some”は遊離しない。ただ、問題は、同じ普遍数量詞であっても“every/any”には起こらないので、普遍数量詞であることが必要十分な条件ではないことが分かる。

例：All the children will watch TV.

⇒ The children will all watch TV.

The children would have all been watching TV.

The children would have been all watching TV.

Both the children will go to the party. ⇒ The children will both go to the party.

Andy, Chris and Sarah all/each have their own dreams.

では、普遍数量詞の“every/any”が数量詞遊離を起こさない理由はなぜだろうか？管見では、答えとして、「“every/any”は“all/both/each”と違って多音節だから」という理由が挙げられよう。なぜなら、遊離数量詞は意味的に主語と同格なので新情報を担っておらず、よって必ずしも第一強勢を持たなくともよいからである。換言すると、結果的に、先行の単音節名詞との間で強勢の衝突が起こらないからである。一方、この衝突の回避は、“every/any”のような多音節語では難しい。多音節語は、必ずどこかに強勢を持たなくてはならないものだからである。

例：All/Bóth¹⁸⁾ of the boys háve long hair.

⇒ The bóys àll/bòth háve (hàve) long hair.

C.f. They bóth have long hair.¹⁹⁾

Boys *both/all have long hair. (Hogg 1977)

上での議論をまとめると、数量詞“every/any”が遊離しない理由には、文法上から来るものと音韻論上から来るものの二種があるということになる。まず前者の理由には、(1)“every”は形容詞的機能しかもたない(代名詞になれない)からと(2)“any”は常に普遍数量詞として機能する訳ではないからの二つが挙げられよう。そして後者の理由には、両語が共に多音節の数量詞であるから、ということが挙げられる。すでに言及した通り、2音節以上から成る内容語は相対的に強いストレスをどこかにもたなくてはならず、結果、旧情報を示す語に相応しくないのである。

例：He has three children, Andy, Chris and Sarah. The children will *every/*any/all come to my party tonight.

上の文で、“The children”とは“Andy/Chris/Sarah”のことが明確で、遊離数量詞“all”は必ずしも強勢を持つ必要がない点に注意されたい。c.f. Évery/Ány child will go to the party.

一方、“everyone”は稀に遊離するのだが(高橋 1985)、その理由はなぜだろうか？

例：The students everyone got a diploma. Those of my family are everyone happy.

その理由としては、“everyone”は“every”と違って「代名詞」であり、上の文では“every one of them”の“of them”が省略されていることが挙げられる。つまり、数量

18) ちなみに、“both”と“all”の語法上の違いについて言及しておく、前者は常に特定の解釈であるのに対し、後者は文脈によって特定のにも総称的にも解釈される。

例：Both of the men, Both the men, Both men (←文脈から特定の男二人を判断)

All of the men/All the men (特定の解釈)、

All men (総称的解釈)

19) この文では、主語の代名詞“they”は意味的に限定されたものでない(旧情報である)ため、後続の“both”に強勢が置かれる可能性が高い。

嗣遊離を起こさない数量嗣であっても、前置詞句「of + 代名詞」が後続すると、文中で副詞として解釈されるからなのである (Allan 1978)。

例：They will, several/many of them, be being carefully watched.

その理由は、恐らく、上の文中の下線部副詞において、D-構造で主語 (They) と意味的に繋がっている代名詞 (them) が付加されることにより、数量嗣 (several/many) と “of-phrase” の間に、数量嗣遊離が起こる際の条件となる「相互 C コマンド条件」(mutual c-command condition) の関係が出来上がっている (Miyagawa 1989) からであろう。

V. 結論

本稿では、英語の前置限定詞と遊離数量詞が取る語順の特異性を取り上げ、その理由を言語学的な観点 (特にリズム論) から考究した。その結果、英語史上で起こったこれらの語順変化にはリズムからの制約が大きく関与している可能性が示された。つまり、英語の語順は、常に強勢の衝突と間隙を回避する方向に舵を切りながら変化してきたということである。しかし、だからといって、リズムからの制約が英語史上常に絶対的な影響力を行使してきたという訳ではない。だからこそ、実際の語順においては、今でも、誤用も含めて多様性が見られるのである。そして、これこそが、リズムからの観点のみでは語順の特殊性を全て合理的に説明しきれない理由でもある。

参考文献

- Allan, K. (1978) Singularity and plurality in English noun phrases: A study in grammar and pragmatics. Unpublished PhD dissertation, Edinburgh University.
- 赤楚治之 (2001) 英語における数量詞遊離の研究：移動による派生、基底部生成、それとも？『主流』62, 同志社大学紀要 41-56.
- Bolinger, Dwight L. (1965) *Forms of English*, Tokyo: Hokuou Publishing Co.
- Cutler, Anne (1980) Syllable omission and isochrony, In. H. W. Dechert and M. Raupach (eds.) *Temporal Variables in Speech*, The Hague: Mouton, 183-190.
- Hogg, R. M. (1977) *English Quantifier System*, Amsterdam: North-Holland.
- Kroch, J. (1974) *The Semantics of Scope in English*, Unpublished PhD dissertation, MIT.
- 窪園晴夫・溝越彰 (1991) 『英語の発音と英詩の韻律』英潮社
- 窪園晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』くろしお出版
- Mitchell, B. and Robinson C. F. (1982) *A Guide to Old English*, 5th edition, Blackwell.
- Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and Case Marking in Japanese*. New York: Academic Press.
- Otaka, H. (2020) An Investigation of the Two Different Pronunciations for the Suffix *-ed* in English — Is there a rule for how to choose one? — *KGU Humanities Review*, Vol. 22, Journal of Kwansai Gakuin University, 97-105.

- Quirk, R., S., Greenbaum, G., Leach and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- Schlüter, J. (2005) *Rhythmic Grammar: The influence of rhythm on grammatical variation and change in English*, Mouton De Gruyter.
- Selkirk, Elisabeth (1984) *Phonology and Syntax: The Relation between Sound and Structure*, Cambridge, Mass: MIT Press.
- Sportiche, D. (1988) A Theory of Floating Quantifiers and Its Colloraries for Constituent Structure, *LI* 19, 425-449.
- 高橋加寿子 (1985) 普遍数量詞に関する覚書 『英米文学研』21号, 233-249.
- Wells, J. C. (2016) *Sounds Fascinating*, Cambridge University Press.
- 安井稔 (1996) 『コンサイス英文法辞典』三省堂

On the Idiosyncrasy of Predeterminers and Floating Quantifiers in English Word Order

— Why and how did the changes occur? —

Hiromi OTAKA

Abstract

In prepositive modification in English, an article (“a/the”) is normally placed at the onset position of a given noun phrase containing adjectives and adverbs (e.g. a/the very long rainbow bridge). However, for some reason, such determinatives called “predeterminers” as “all/both/half/double/twice/one-third/three-quarters/such/what” deviate from this norm in the English grammar as exemplified below. That is, the articles syntactically give way to the predeterminers.

Ex. All the people, Both the parents, Half the amount, Double the income,
Twice the pay, One-third the cost, Such a nice man, What a nice day it is!

However, the forms beginning with an article seem to have originally been grammatical before. That is why L2 English learners mistakenly tend to use these old forms (e.g. *the all people, *the both parents, *the half amount). As a matter of fact, it is not the case that these forms were never used in the past at all. Moreover, the above assumption bears out the reason why “all/both/half” cannot co-occur with some types of “central determiners” like “each/every/no/some/any/enough/either/neither,” suggesting that “all/both/half” used to be of central determiners as well.

The goal of the present paper is twofold. One is to explore the reason as to why predeterminers came to be placed before an article in Modern English. The other is to explore the reason why quantifiers floating occur only on some restricted number of determiners like “all, both and each” as exemplified in the sentences below.

Ex. All/some/both/either/many/each of us have our own dreams.

⇒ We should all/both/each/*some/*many have our own dreams.

In order to answer these questions reasonably, a prosodic analysis based on *Stress clash* and *Stress lapse* is applied in addition to a traditional semantic approach based on “universal/existential quantifiers” for example. The present paper is not the first attempt to take a rhythmic approach into consideration to deal with the issues of

grammatical developments. A close relationship between rhythm and the choice of vocabulary or words order has already been attested by several phonologists (Bolinger 1965, Kubozono & Mizokoshi 1991, Kubozono 1995, Schlüter 2005, etc.). However, this paper is the first to tackle the idiosyncrasy of the word orders that the pre-determiners and floating quantifiers take from not only a semantic, but also a prosodic viewpoint.